



香港本屋めぐり

第2回 艺鵠(アイゴツ)



トラムの走る軒尼詩道。右が富德樓

●縦に伸びる芸術村「富德樓」

香港島の湾仔（ワンチャイ）エリア。香港名物2階建電車——トラムが走る目抜き通りに、特にこれといった特徴のない古いビルが建っている。富德樓。この14階今回紹介する「艺鵠書店」がある。このビル内で2008に開業し14階に移ったのは2014年だ。日本では書店がビルのかなり上階にあるというケース少ないのではないだろうか。そこには香港的な事情がある。家賃だ。これについては連載第1回の中の「香港書店事情」に詳しい。

1基だけあるエレベーターに乗ると、入り口や壁には様々なポスターなどが貼られている。実は、このビルは通常の商業ビルではなく、今回の書店名でもある「艺鵠（ACO / Art and Culture Outreach）」という民間芸術団などが運営しているビルであり、多様な芸術家やグループがアトリエなど拠点を構えている。そこで行われるイベントの告知がビルの入り口やエレベーター内に貼られているというわけである。富德樓は、いわば縦に伸び「芸術村」だ。



2人の書店員。左が陸海敏（ミミ）氏。右が連安洋（阿洋）氏

●書架よりもテーブル そこに平積みの本が

最上階——14階で降りると、このフロア全体が艺鵠の店スペースだ。椅子に腰掛け本を読んでいる客もいる

香港の小さな書店は、所狭しと書架が並んでいるのが例。しかしこの書店は壁に沿って書架が並んでいるだけで、店舗スペースの大部分はテーブルで占められ、そこに各種の書籍が平積みされている。艺鵠では時折、座・読書会・演劇、さらにはミニ・コンサートが開催される。テーブルを片付ければ広い空間が誕生するのだ。「本を販売する店」だけではなく、ある種のハブになっているのだ。限られたスペースならではの工夫が凝らされている。

●選書もこなす書店員

2019年、ある秋の日の午後、書店員の陸海敏（ミミ）と連安洋（阿洋）氏に話を伺った。まず、店頭に並べる本の選択基準について尋ねると「たちが好きな本です」と、2人ともほぼ間髪を入れずえた。書店員の2人が選書に対して大きな裁量を持つ。書店経営者の信頼が伺い知れる。具体的には、大型書店にはあまり置かれていない本が多いという。たとえば、香港の独立系の小さな出版社が版したものの。種類としてはアート関係（書店名に「Art and Culture」ある通り）、そして香港の現状に関する書籍。社会連



動・抗議活動。さらにはアナーキズム関連の本。英語本も並んでいる。

客層は、大学生から40代~50代が主ということだ。そして中で、独立書店という存在。そしてそこに並んでいる上記のようなタイプの本。それらは今の香港社会でどのような意味を持つだろうか。

●読者との交流

「SNSを通して読者との交流を進めています。その中読者がどのような本を求めているかということを知り私たちがそれを見つけてくるということもあります。これは大型書店にはない機動性かもしれません。読者と結びつきが強いのです」

「最近よく話題になることとして、大型書店の『政治審査』があります。ですので、独立書店が持つ選択の由は重要なことでしょう」

「大型書店はスーパーマーケットのような場かもしれません。皆が必要としているものを備えている。一方、独立書店は小さな商店に喩えられます。スーパーでは売っていないもの、あるいは皆が必要としているわけではなが、一部の人が求めているものが見つかる場所。社会発展には、こうした多様な選択が大切ではないでしょうか」



書店内の様子。左下は講座の様様



黄勤帯氏『fukushima』

●社会運動と書店

ビルの下のトラムが走る道、軒尼詩道（ヘネシー・ロード）。香港の、いわゆる平和的なデモ行進のコースだ。2019年の初夏、100万人、200万人のデモが行われた時この道は人波で埋まった。こうした大規模な社会運動様々な分野のビジネスに影響を与えている。この書店どうだろうか。

「2019年6月、大きな抗議活動が始まってから、逆に上げは伸びました。多くの人が、新しい考え方、別の点からの物の見方を採っているからではないでしょうか。本から何かのインスピレーションを得たい、と。会全体が“本”を求めているように感じられました」

「まさにデモ行進が行われている時に、その途中にここへ上がってきて本を買っていく人もいます。あるいは進の始まる前、終わった後に、椅子に座って本を読み休んでいく人もいました」

芝罘は書店であるだけでなく、出版社の側面も持っている。ミミと阿澤は店頭での販売の他に編集・出版も当している。多忙だ。

●ミミと阿洋のお勧め

テーブルと書架に並んでいる本の中から、2人のお勧めを尋ねた。

まず、「本」ではないが写真集だ。いや「写真カード集」と言うべきか。香港のベテラン報道写真家・黄勤氏の『fukushima』（出版社：麻雀製作）。これは黄氏311（東日本大震災）後の福島をインスタント・フィルムで撮ったもの。小さな箱に108点の写真が収められてい

る。地震発生当時、黄氏と夫人は秋田で暮らしていた夫人が秋田の大学で教鞭を執っていたのだ。報道写真である黄氏は、もちろん安全を確認しながら被災地に付け撮影したそう。

もう1冊は『老爹媽思廚』（Yeung Yang編。出版社：MCCM Creations）。第二次世界大戦前に中国大陸から港に移民してきた人々——現おじいさん・おばあさん取材し、その手作り料理を軸に、香港での暮らしを綴ったものだ。香港人の生活の貴重な記録ともなっている

結びに、書店名の『艺鵠』という表記について。香港使用されている繁体字では「藝鵠」となるところ、「藝」ではなくなぜ簡体字の「艺」を使っているのか「艺」が白鳥のように見えて、二文字の組み合わせがしいから、という答えが返ってきた。

▼今回訪ねた書店

艺鵠

灣仔軒尼詩道365號富德樓14樓

14/F., Foo Tak Building, 265 Hennessy Road, Wanchai

Website : <https://www.aco.hk>

FaceBook : <https://www.facebook.com/ArtandCultureOutri>

▼紹介した書籍のデータ

『fukushima』

作者・撮影：黄勤帯

編集：黎加路

デザイン：區德誠

出版社：麻雀製作

サイズ：88mm x 108mm

内容：108枚のPolaroid写真の原寸大印刷

発行数：350

ISBN：978-988-77937-0-0

『老爹媽思廚』

編者：Yeung Yang

出版社：MCCM Creations

サイズ：168mm x 240mm

ページ数：284

ISBN：9789881858399



『老爹媽思廚』



▼筆者プロフィール

大久保健（おおくぼ・たけし）

1959年北海道生まれ。創価大学卒業。香港中文大学日学及び日本語教育学修士課程修了。

深圳・香港での企業内翻訳業務を経て、フリーランス翻訳者。

日本語読者に紹介すべき良書はないかと香港の地元籍に目配。

トップへ